

はじめから工場閉鎖ありきか、不可解な会社の対応

東京と埼玉の境を流れる中川に寄り添うようにして国道67号線が走り、その上を大きな芋虫のような首都高6号三郷線が横切っている。そんな埼玉県三郷市の花和田地区にある大小様々な工場や倉庫が立ち並ぶ一角で、腕章に鉢巻き姿、組合旗にのぼりを手にした70名ほどの集団が静寂を

破つて氣勢を上げた。

梅雨明け間近独特の蒸し暑さの続く7月14日の午後、建物の上部にセブンズ・クリーナーと表示されたクリーニング工場前では、会社の一方的な工場閉鎖に反対する全国一般東京東部労組デイベントリー労組支部セブンズクリーナー分会のストライキが決行され

た。

(撮影 岩崎松男)

支援には支援で応え、近隣の70名が集結。

小野分会長の経過報告によれば、このパト組合員11名がストライキに突入した理由は「会社は内緒で工場を閉鎖して茨城の石下工場へ集約するつもりだが、組合を結成して団交で工場閉鎖の理由を質したところ、経営赤字と大家が契約更新を認めないからの回答がなされた。しかし『三郷工場を存続させるのであれば分会も赤字解消に協力する』との要求に会社は『存続

に向けて努力する』と答えながら約束を破り大家と9月打ち切りで合意し、一方的に説明会を実施した。最初から工場閉鎖ありきの会社の姿勢に抗議して本日のストライキとなった」とのことだった。

会社からは笠間常務がビデオカメラを手に登場し「敷地内には立ち入らないように」と集会を妨害しつつ、答弁を求められると一転して「コメントはしません」と、本社役員から「ビデオ撮影はやれ、だが言質はとられるな」との業務命令に馬鹿正直に従っている様子がバレバレだった。

組合員や支援者達が取り囲み「工場の経営は改善されているし、大家も今までの条件なら契約更新して良いと言っている。工場移転の理由はなくなつたのではないか」、「石下工場の通勤には片道1時間半かかり、高速代もかかるし事故も心配だ」、「この仕事が好きで13年も働いてきた。今後の生活を考えると不安でたまらない」などの率直な意見と怒りを笠間常務にぶつけたが、一片の同情の余地すら見せない態度に参加者達の怒り

は外気温度以上にヒートアップした。

生まれて初めてのストライキを体験したパト労働者達の「一生懸命働いてきたのに、こんな会社の仕打ちは絶対許せない」との言葉に集約されるように、会社に経営責任をキチンととらせ工場閉鎖を撤回させるまで闘うことを全体で確認し合つた。

(本誌副編集長 岩崎松男)